

法華八講・法華三昧

開催日：法華八講は 10 年に 1 度、夏に開催されます。法華三昧はその間の年に行われます

法華八講と法華三昧は、宇佐神宮の上宮で法華経とその解釈を中心に行われる仏教の儀式です。仏教の儀式が神社で行われているということは、かつて神社と仏教を融合して崇拝していた神社と寺院の複合体であった宇佐神宮の神仏習合のルーツを表しています。また、宇佐神宮と仏教の天台宗との強い歴史的つながりも反映しています。

天台宗の創始者である最澄（伝教大師、767–822）をはじめ、多くの著名な僧侶が八幡神に祈るために宇佐に巡礼してきました。803 年に、最澄は密教を学ぶために中国に旅立ちましたが、船が損傷し、次の出航の機会を待つために九州で一年を過ごしました。最澄は安全な航海を宇佐の八幡神に祈願し、804 年に中国に到着して、805 年に帰国しました。最澄は宇佐を再び訪ねて八幡神の守護を感謝したとき、八幡神に法華経で説教を行いました。伝説によれば、八幡神は高位の僧侶の紫の衣を褒美として最澄に贈りました。

最澄と八幡神のつながりを称えるために、天台宗の座主と高位の僧侶が 10 年に 1 回、宇佐神宮に夏の巡礼を行い、上宮の本殿で法華八講（「法華経に関する八つの講座」）と呼ばれる特別な礼拝を行います。神職によるお祈りに続いて、「三問一答」（三つの問いと一つの答え）という儀式的な対話が行われ、3 人の僧侶が師に仏教の教義について 3 つの質問を問い、師が答えとして説教をします。法華八講はほとんど見えない場所で行われていますが、参拝者は境内の行列を観察し、外から説教を聞くことができます。

法華八講の儀式の間の年、法華三昧（「法華経の瞑想」）と呼ばれるより小規模な儀式は、近くにある国東半島の六郷満山の寺院から宇佐神宮へ来る僧侶によって行われています。

宇佐神宮が神社と寺院の複合体であった時代には、このような儀式がはるかに頻繁に行われました。しかし、明治政府が 1868 年に神職と仏教の分離を命じた後、それらは停止されました。この習慣は 1978 年に復活し、そしてそれ以降、神職たちは宇佐神宮へやって来る僧侶たちを歓迎しています。